

昨年10月、同窓の大西昭夫さん（商昭和48）より、阪急電鉄に関わる明治末期から戦前にかけての資料をご寄贈いただきました。そして、その資料紹介「阪急電鉄の歴史と関西学院～古い沿線案内や絵葉書で見る変遷～」を本誌第44号（2017年12月10日）にご寄稿いただきました。すると、すぐに初等部から当室にお電話があり、寄贈された資料を4年生の社会科の授業で使わせてほしいと相談を受けました。その授業の様子や、生の資料を目にした子どもたちの反応はどうだったのでしょうか？

なお、ご寄贈いただいた資料の一部は、大学博物館や神戸文学館の展示にも使われました。（学院史編纂室）

## 本物の資料を使って学ぶ ～初等部4年生社会科～

石田航平

4年生の社会科の「郷土の発展に尽くした人」という単元で小林一三について学習しました。どのような学習をしたのか簡単に説明します。

はじめは花の道にある小林一三像【右】です。毎日子どもたちが通っている「花のみち」にある銅像ですが、普段は気に留めて歩いてないので、銅像があることすら知らない子もいます。銅像をよく見ると、「小林一三先生像」とあります。「先生って書いてある」。一人の子どもが気づきます。すかさず、「なぜ“先生”と呼ばれているのか」聞くと、「阪急を作った人」、「歌劇を作った人」と、知っている子どもが答えます。「作っただけで銅像になるの?」と重ねて聞くと、答えに困る子どもたち。「なぜ先生と呼ばれ、今でも大事にされているのか調べよう」。こうして、小林一三の学習がはじまりました。



最初に調べたのは、箕面有馬電気軌道（阪急電鉄の前身）のことで、「自分が電鉄会社の社長ならどこに線路をひきたいか」聞くと、「人がいっぱい住んでいるところ」、「会社や工場がたくさんあるところ」と答えます。ここで、小林一三が何もないうちに線路をひいた事実を伝えると、子どもたちは「えっ!？」と驚きます。「なんでこのような線路のひきかたをしたのか」考えていくと、「都市と都市とを真っ直ぐ結べるから速い」、「土地も安く手に入るだろうし、直線なら線路が短くなるから安い」という良さに気づきます。思わず、「小林一三はかしこいなあ」という言葉が漏れてきました。

次に調べたのは、線路をひいた後に作った家をどうやって売ることかということです。「家の見学会を開く」、「家具付きの家にして、すぐ住めるようにする」、「お試しで住める期間をつくる」などの考えが出てきます。子どもたちは、自分の生活経験や見たり聞いたりした情報を最大限に使って豊かに予想します。ここで、「日本初の住宅ローンを用いて住宅を販売した」事実を資料から読み取ります。さすがにローンを予想していた子どもはいません。「ローンにすることの良さは何?」と聞くと、「大金を持っていない人でも、毎月のお給料から買える」、「サラリーマンでも買える」と、購入者にとってのメリットが発表されます。すると、一人の子が小林一三にもメリットがあると言い出しました。どういうことか聞いてみると、「多くの人に買ってもらえるから、会社も儲かる」と言うのです。この発言を受けて、「すごい」とつぶやいた子がいます。「何がすごい?」と聞き返すと、「自分のためにもなるし、みんなのためにもなっていることがすごい」と答えます。小林一三が作った物だけではなく、その裏にある一三の思いにもだんだんと気づきはじめていきます。

その後は、「週末、お客さんに乗ってもらうために何を作るか」（大西昭夫さんが学院史編纂室に寄贈された箕面動物園のはがきを資料として使いました）、「宝塚歌劇の入場料を下げるために何をしたらか」、「電鉄会社がプロ野球球団を持つことの良さは何か」、「百貨店の最上階には何を作るか」、「阪急百貨店名物カレーライスをどうやって安く提供したか」など、小林一三が作ったものとその理由について調べていきます。小林一三の



発想のユニークさは驚きの連続で、子どもたちはどんどんその魅力にはまっています。そして、自分のことだけでなく人々のため、とくに「家族」を大事にした人ということに気づいていきました。

それから、ご寄贈いただいた昔の宝塚の地図を見せました。歌劇がある、植物園がある、遊園地がある。そんな地図を見て、子どもは「楽しそう、小林一三の夢が詰まっているみたい」と言います。「今でもあったらいいと思うけど、そしたら初等部はなかったと思うから、そ



れはそれで複雑・・・」。そんな声も聞こえてきます。子どもたちが一番驚いたことは、初等部が今ある場所はグラウンドだったということ。そして、昔の写真に写っている杉の木が今も教室の窓から見えることです。「あの杉の木は宝塚が変わるのをずっと見てきたのか・・・」。「小林一三がいなかったら今の宝塚はないなあ」。思わず口にします。すかさず、「それって宝塚だけ？」と聞き、大西さんご寄贈の「沿線案内」(コピー)を子どもたちに配りました。沿線図からは、「阪急電車の近く住んだら楽しそうだ」、「小林一三がいなかったら、今の僕たちの生活はない」など、様々な気づきがありました。

最後に、子どもたちに銅像を見せ、再度問いかけました。「なぜ先生と呼ばれているの?」。「その理由はありすぎて簡単に答えられない」と言います。「なら、ノートに書こうか」と促すと、何ページにもわたって小林一三のすごさをまとめていました。今までなんとなく見ていた小林一三の銅像の見え方が少しは変わったように思います。

社会科は資料が命です。映像やデータではなく、当時のままの姿で見ることができたことに、私も、子どもたちも、大変感動しました。本物にしか伝えることのできないことがあると、改めて感じました。貴重な資料をご寄贈くださった大西さん、資料を授業で使うことをお許しくださった学院史編纂室長の舟木先生に心から感謝申し上げます。

【初等部教諭】

★ ★ ★ 子どもたちの感想を紹介します。 ★ ★ ★

★小林一三さんがしたのはすごいと思います。人とはちがう考え方で人を楽しませ、いつも家族や子どもが楽しめるように考えていて親みたいだなと思いました。そして何を作る時もたくさん工夫をして先のことを考えているんだなと思います。それに、みんなが無理だと思っていることを現実にしているところもすごいです。そして一番すごいのはいつも人のことを思っていることです。まさに小林一三さんがしていることは Mastery for Service だなとぼくは思いました。(M. N)

★小林一三さんのことをほとんど知りませんでした。でも今では本当の先生だと思います。なぜなら小林一三さんは自分のためだけでなく、家族や子どものことを思ってたさんのアイデアを出した人だからです。それに小林さんがいなければ今の宝塚はないからです。小林さんがつくった宝塚にいることをありがたく思ってます。していきたいです。(A. K)

★はじめは、そんなにたくさんものをつくっていて、お金あるのかなあと思っていました。でも、小林さんはお金より家族連れとか子どもが楽しんでいるすがたや笑顔の方が大切だったんじゃないかなとわかりました。また子どもだった時に辛い思いをしていたなんて思ってもいませんでした。でも、つらかったからこそ、みんなのために全力をつくしてくれたんだと思いました。勉強を終えて、すごいことを学べたし、お宝を見せてもらって楽しかったです。(E. H)



上ヶ原移転後(1929年頃)の発行と思われる「阪神急行電鉄沿線案内」(コピー)を手にする子どもたち。他3点も社会科の授業風景。